第１回　福岡県薬剤師会学術大会　口頭発表

VEGF 薬の血圧上昇副作用対策における病薬連携

坂口敦彦
総合メディカル（株）そうごう薬局石丸店

【背景】分子標的薬 VEGF 薬治療による血圧上昇の副作用は発現頻度が高く、好発時期も 1-2 ヶ月と早いため、早期からの血圧管理が重要である。しかし服用患者の家庭血圧測定の実施率は低く、受診時に急激な血圧上昇を発見されることもある。また、血圧管理の目標設定については、高血圧既往の有無、患者年齢などにより、目指す目標値が異なるため、個別の設定が必要となる。そして VEGF 薬の種類により血圧が急上昇することもあるが、その際、病院に申し出るべき血圧の基準が明確となっていない。

【目的】がん薬物療法は入院で初回投与を行う場合もあることから、家庭血圧測定実施、副作用対策についての指導において、外来治療に移行する際の病薬連携は重要となる。そこで今回、血圧上昇の早期発見と早期対応を確立するため、病薬連携し対策を検討したので報告する。

【方法】病院薬剤部との連携会議にて、VEGF 薬使用患者の薬局での指導における問題点について共有し、特に血圧上昇の副作用の早期発見・早期対応策について検討した。そのなかで優先順位の高い問題について、医師・病院薬剤師・薬局薬剤師で、血圧管理の目標設定や患者が申し出るべき管理基準、問い合わせ対応の役割などのルールを設定した。

【結果】連携会議では、薬局に来局する VEGF 薬使用患者が家庭血圧測定をなかなか実施しない現状 、血圧上昇時の対応基準がないため、病院と相談する際に困った事例などを共有した。それら問題点を踏まえ、入院時に、医師・病院薬剤師によって高血圧治療の有無などを聴取し、血圧管理目標を設定し、退院後には家庭血圧計を用いた個別目標に基づく血圧管理について患者に指導することとした。また、薬局では、血圧手帳による把握と降圧薬治療のアドヒアランス管理の徹底、血圧上昇時には定めたルールに基づき、病院薬剤部に連絡することとなった。

【考察】VEGF 薬の血圧上昇の副作用は、がん患者にとっては自覚症状も少なく、意識も薄くなりやすい。しかし、血圧上昇により治療自体を中断させないためにも病薬連携で早期の対応が必要である。また、血圧管理は既往歴によって、担当医だけでなく腎臓内科や循環器内科などの意向もあるため、院内で予め個別の管理基準を設定することにより、より効率的な副作用対応が期待できる。今後も病薬連携を進め、がん治療薬による副作用への対策を充実させたい。